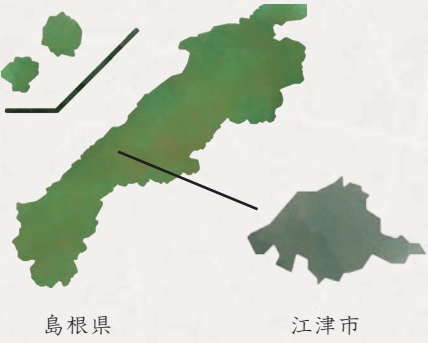


湯けむりに誘われて

—新しい湯めぐり空間の提案—



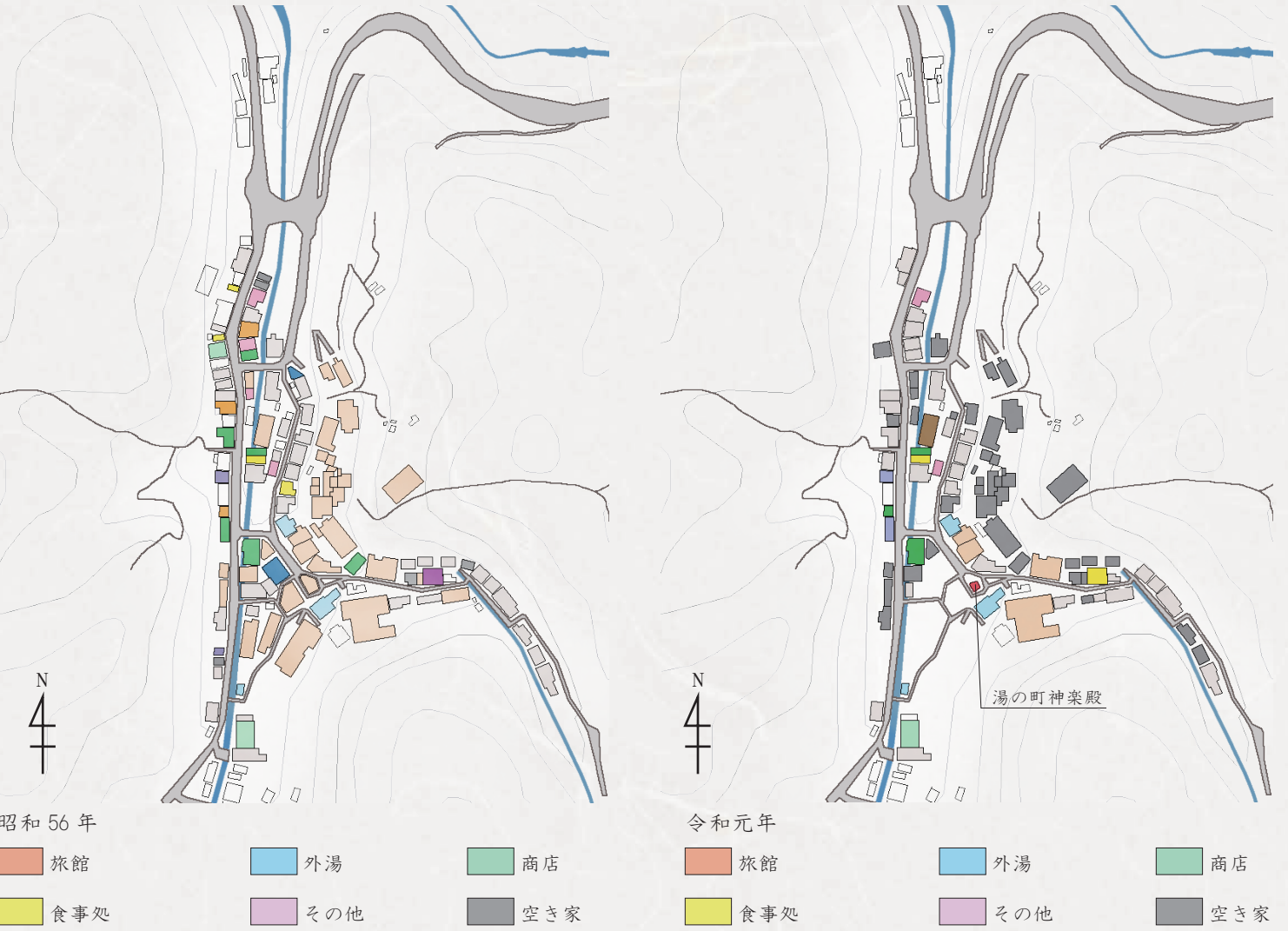
敷地



島根県江津市にある有福温泉町は1350年以上前に発見されたといわれている歴史ある温泉街。昭和40、50年代には芸妓が町中を闊歩するなど、とても活気のあった町。大正から昭和のノルスタルジックな雰囲気を漂わせるこの街では、坂道や路地裏に細い階段が張り巡らされ、建物が雛壇上に建ち並んでいる。広いとは言えない温泉街の中に当時は15、16軒もの旅館が建ち並ぶなど、温泉街として賑わいを見せていた。しかし現在では、空き家や廃業となる旅館が増え、町は当時の活気を失っている。

有福の生業と文化

古くから温泉街として栄えた有福温泉街ではかつて数10軒の旅館と商店で成り立っていた。小さな街で住民たちは、旅館や芸妓で働いていた。有福温泉荘（原爆被爆者有福温泉療養研究所）の閉館による利用客減少や水害や火災による消失、破産などによって現在は、旅館は三軒である。数少ない旅館では家族経営中心とし、高齢化が進んだこの街では外湯が小さなコミュニティの場となっている。薬師寺から湧き出る源泉は、川へと流れ出て昔は飲料水として洗濯をする場として使われていた。

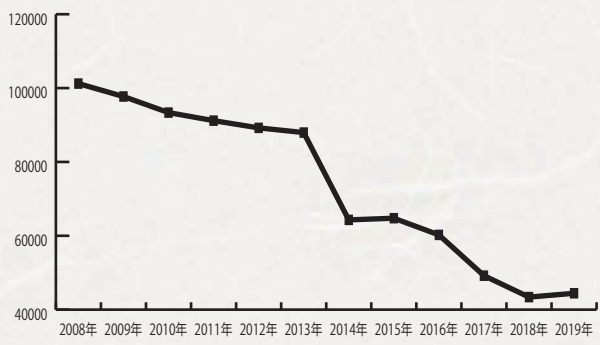


背景・目的

かつて、温泉街は社員旅行などの団体旅行が多かったが、2000年代に入ると個人旅行や日帰り旅行で体験や交流を重視する時代へと変わった。それにより、入込客は減少し、宿泊施設の倒産といった厳しい状況が続いている。倒産などによる空き家の増加はその地の魅力低下へと繋がり、歴史ある温泉街が衰退してしまう。だが、温泉と人は身近なものであり、だからこそ歴史ある温泉街を衰退して失うわけにはいかない。この有福温泉では、建築基準法上建て直しができず昔からの建築物が多く残っており、どこか懐かしさを覚える。本設計では、衰退していつている有福温泉のこれからの在り方、観光客と地域の人とのつながりについて提案する。

衰退する温泉街

観光客数の減少



観光客は年々減少傾向である。平成22年の平成の大火により、原風景の一部が失われてしまったことや、豪雨による被害で平成20年代前半は減少傾向であると考えられる。また、有福温泉荘の閉館した平成25年度では、大きく推移が減少している。これらの影響も含め、若い層を取り込んでいた旅館も破産により閉館したことも近年の減少の原因の一つであると考えられる。

木造密集地域



経営破綻となった旅館があったり、身体などの理由で集落に出たため住人がいなくなった家が多くある。倒壊寸前や植物に囲まれたものもある。また、建築基準法上の理由で細い路地に面していた空き家・倒壊寸前の建物は建て直しができず解体されたため、歯抜け状態になっている。

外湯の利用



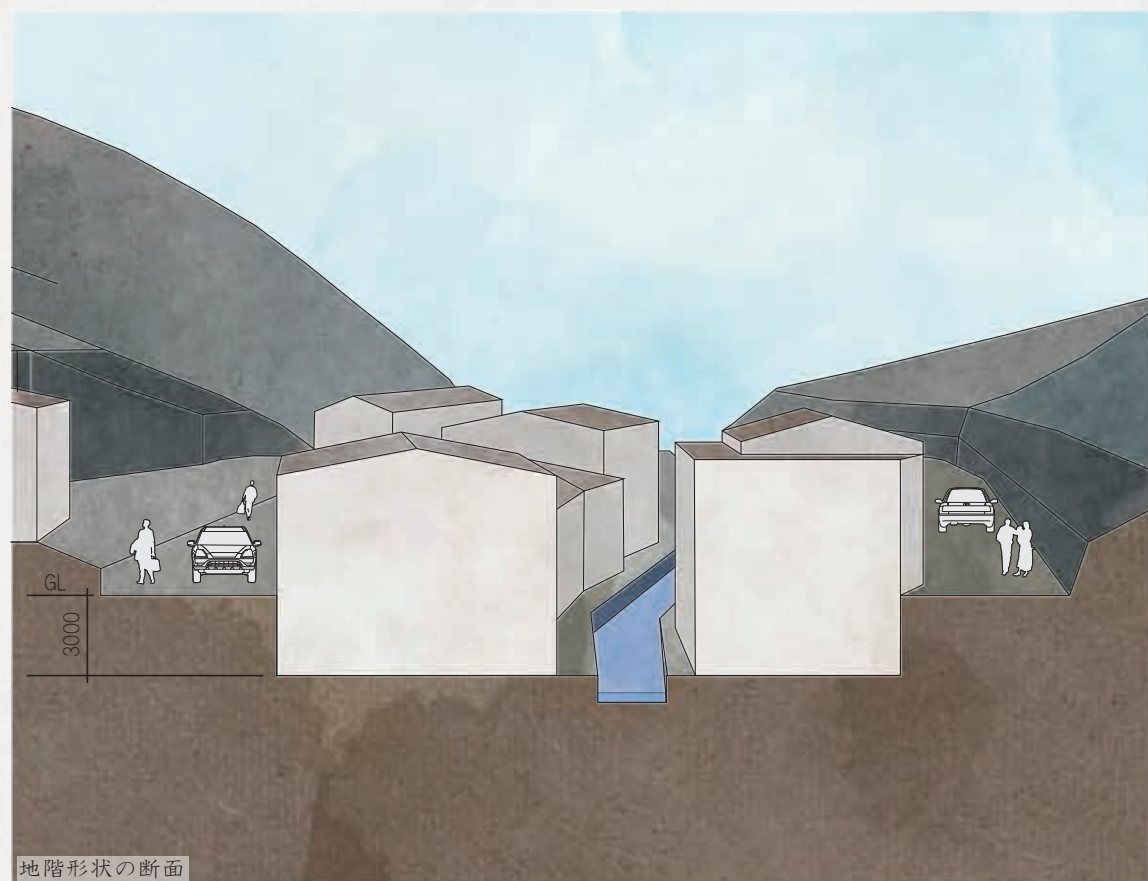
有福温泉には、薬師堂の下にある御前湯と木造のさつき湯、少しぬるめのお湯ののやよい湯の3つの外湯がある。かつては、農民たちなどが日ごろの農作業で疲れた体を癒す湯治場として使われてた。現在では、旅館に泊まった観光客が利用したり、地元住民や市内の住民が生活の一部として毎日のお風呂として使われている。

空き家の増加



有福温泉は細い路地沿いに多くの木造建物が建ち並ぶ木造密集地域のため火災が生じると延焼しやすい。2013年にも火災のため2つの旅館と民家がなくなりその場所はぽっかりと空間が開いてしまった。

断面要素



① 暗渠構造



有福温泉には、狭隘な谷あい位置しているため湯治川や東側から流れてくる川を覆う暗渠や湧き出た温泉を各旅館や外湯に送る排水暗渠が複数ある。それら暗渠の上には、旅館や民家が建ち並んでいる。

② 地階



川底から道路面までのレベル差が大きくなっている。そのため、川沿いには道路側からみると平屋や2階建ての物が、川側から見ると地階の存在が確認できる建物が複数ある。また、川沿い以外にも雛壇上の地形によって、る沿いにも地階を持つ建物がある。

③ 雛壇地形



谷あいの斜面にそり立っているため、温泉街の建物は雛壇上に建ち並んでいる。また、それにより細い路地が張り巡らされ、傾斜が大きいものから小さいものまでの石段が複数ある。

有福の空間構成



メイン通り

有福温泉中心のメイン通りである。お土産のある商店や旅館外湯が建ち並んでいる。



源泉

有福温泉には10カ所の源泉がある。だが、旧旅館跡地など利用されていない源泉があり、それらは地下を通して隠されている。



細い路地

メイン通りと抜けると細い路地が張り巡らされている。かつて、路地のきめ細やかなネットワークは、人々の暮らしを支えていた。



湯のまち神楽

有福温泉の中心に湯のまち神楽殿がある。月に2回土曜日の夜に有福神楽保持者会による有福神楽を行っている。



有福の地に眠る記憶を まもる

有福にはまもるべき記憶がある

複雑怪奇な集落構造、複雑な形の建物、雰囲気、時の流れ、温泉

失われかけた記憶を呼び戻し、新たな有福をつくり

このまちをまもる

まちに点在する資源がまちを ささえる

まちの中には島根県産材や日本三大瓦の石州瓦が豊富

その資源を利用することでささえる

まちには源泉や暗渠、地階などの要素が点在している

それらを使うことで有福らしいまちをささえる

新たな有福を そだてる

有福は細い路地を張り巡らせることで

独自のネットワークを築いてきた

だが、現在の法律上路地に面している場所は

新築することができず、空き家は放置か更地とされていた

増改築を繰り返すことで周遊スポットを増やし

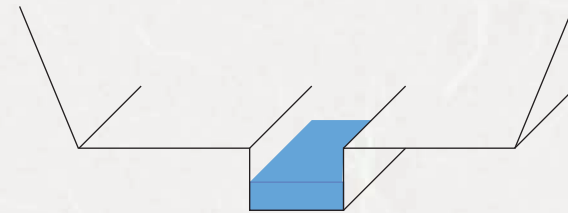
住民たち・観光客とともに育てていく

きっかけを重ねる湯けむりの つながり

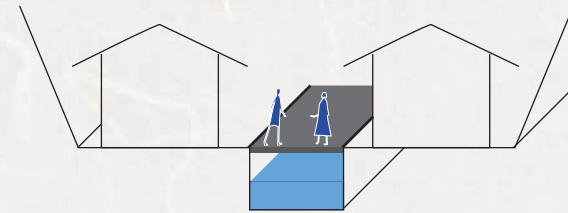
湯けむりに誘われ人々は「余白」に集まる

ゆるいきっかけを重ねることで

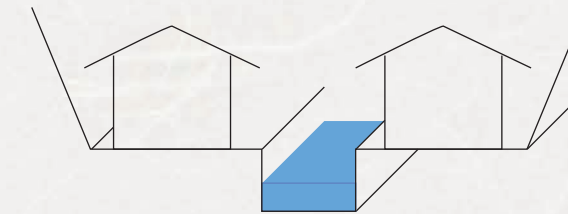
観光客と住民のつながりが生まれる



狭隘な谷に流れるかつての川



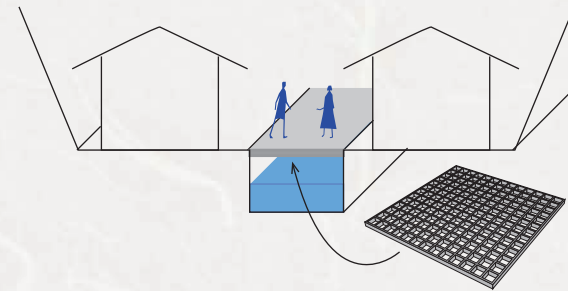
源泉の発見により温泉地として、
まちを形成するために蓋された
水路



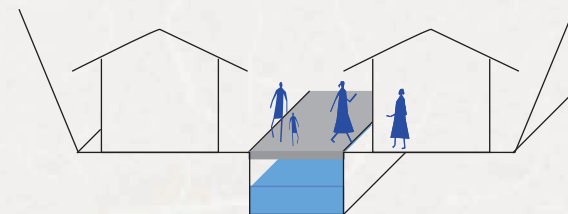
記憶の蓋をされた暗渠を明渠とし
てかつての水路を呼び戻す



点在している今は使われていない
源泉を水路へと流す



明渠となった水路の上に湯けむり
格子を設置し、湯けむり路地を
作って周遊路を広げ、新たな有福
をそだてる



湯けむりが建物の中まで入り込
み、あいまいな空間ができゆるい
つながりができる

計画

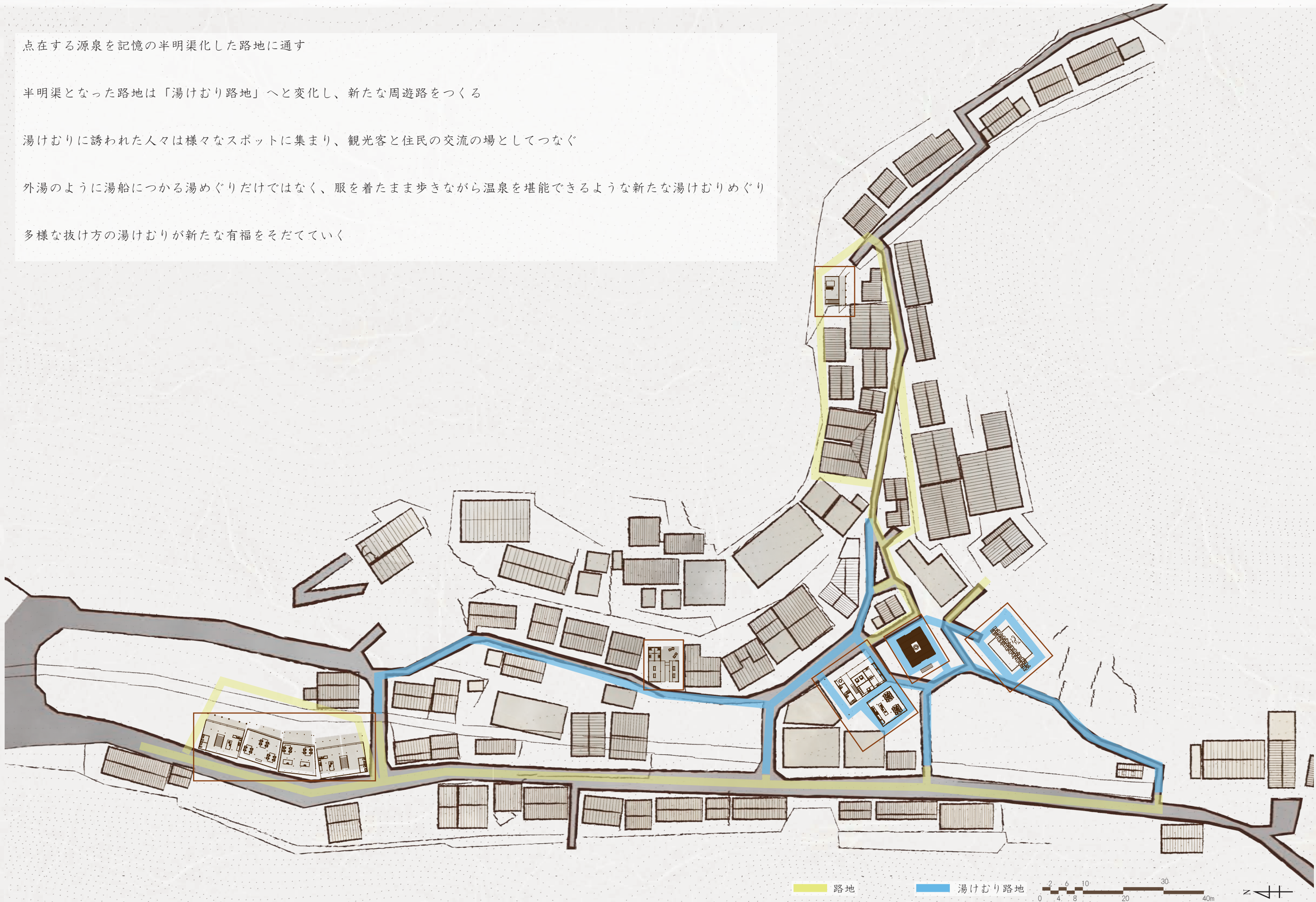
点在する源泉を記憶の半明渠化した路地に通す

半明渠となった路地は「湯けおり路地」へと変化し、新たな周遊路をつくる

湯けおりに誘われた人々は様々なスポットに集まり、観光客と住民の交流の場としてつなぐ

外湯のように湯船につかる湯めぐりだけではなく、服を着たまま歩きながら温泉を堪能できるような新たな湯けおりめぐり

多様な抜け方の湯けおりが新たな有縁をそだてていく



湯けおり宿

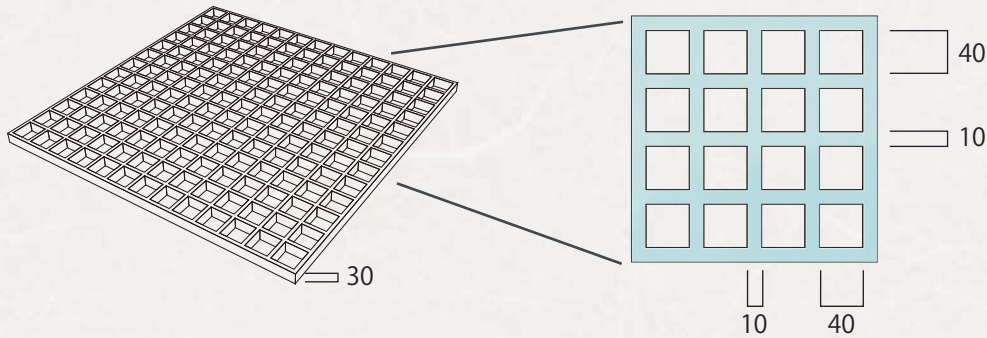
木造密集地域のぽっかりとあいてしまった空間に密度を高め、湯けおり路地を挿入する。元あった風景を取り戻すとともに新たな景観をつくる。
格子やすのこなどにより湯けおりの通り道を変化させる。



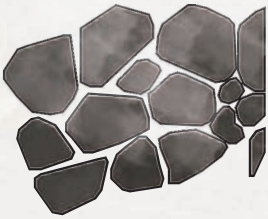
湯めぐり、湯けおり巡りする起点となる場所。ここから湯けおりに誘われて周遊がはじまる。

湯けおりの抜け方

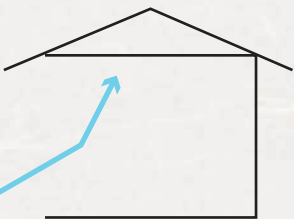
湯けおり格子
半明渠となる湯けおり路地に格子を
設け、下に流れている温泉の湯けお
りを抜けさせる

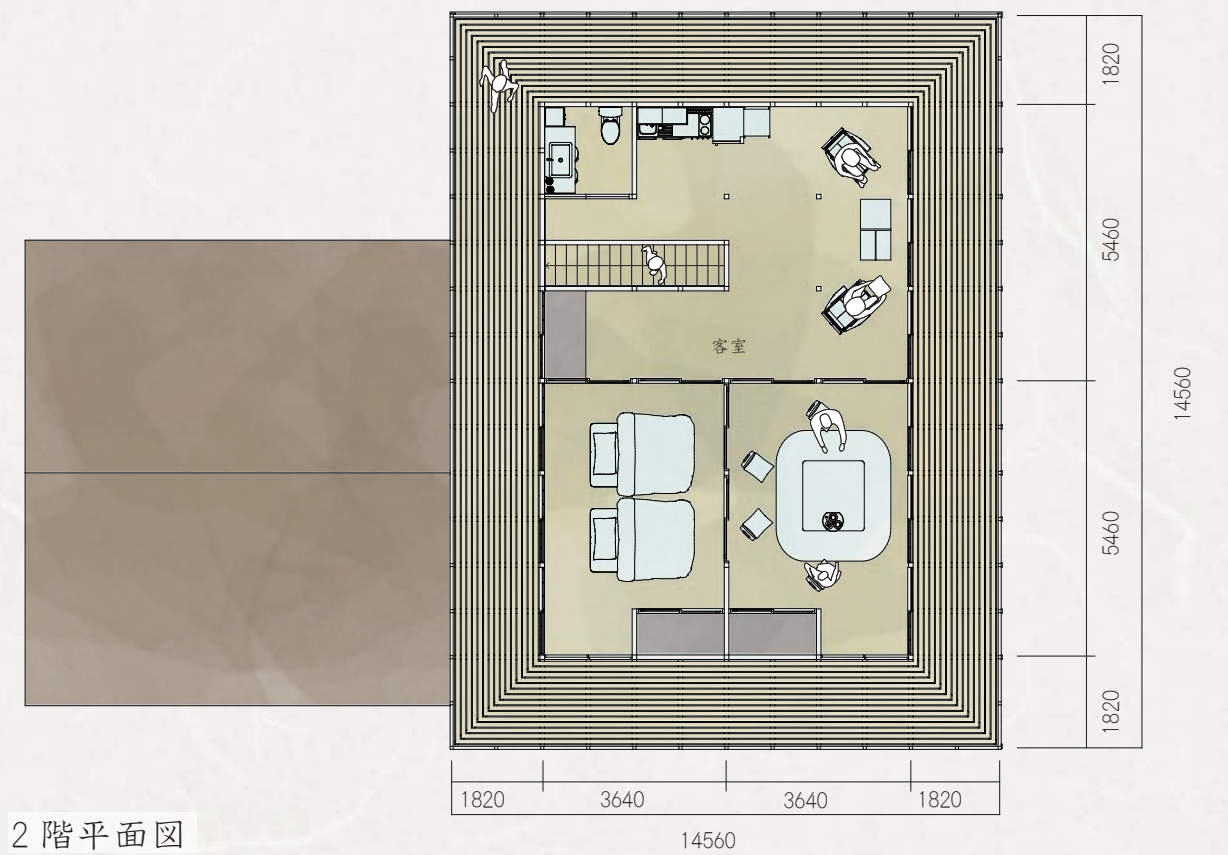
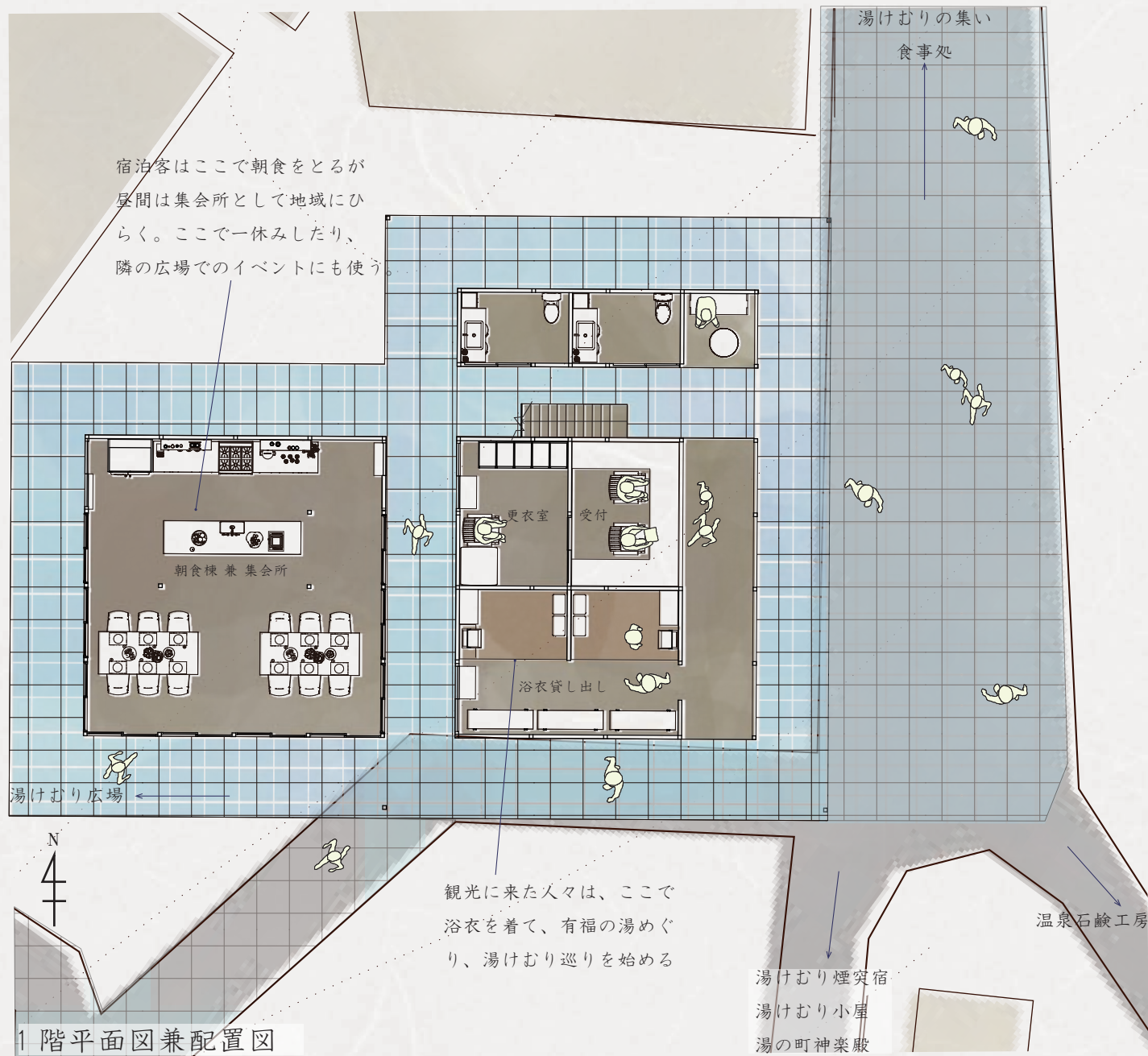


湯けおり石垣
雑壇地形より1段ごとにある石垣に
上の段から流れる温泉をつたわらせ
ることで湯けおりの壁となる。



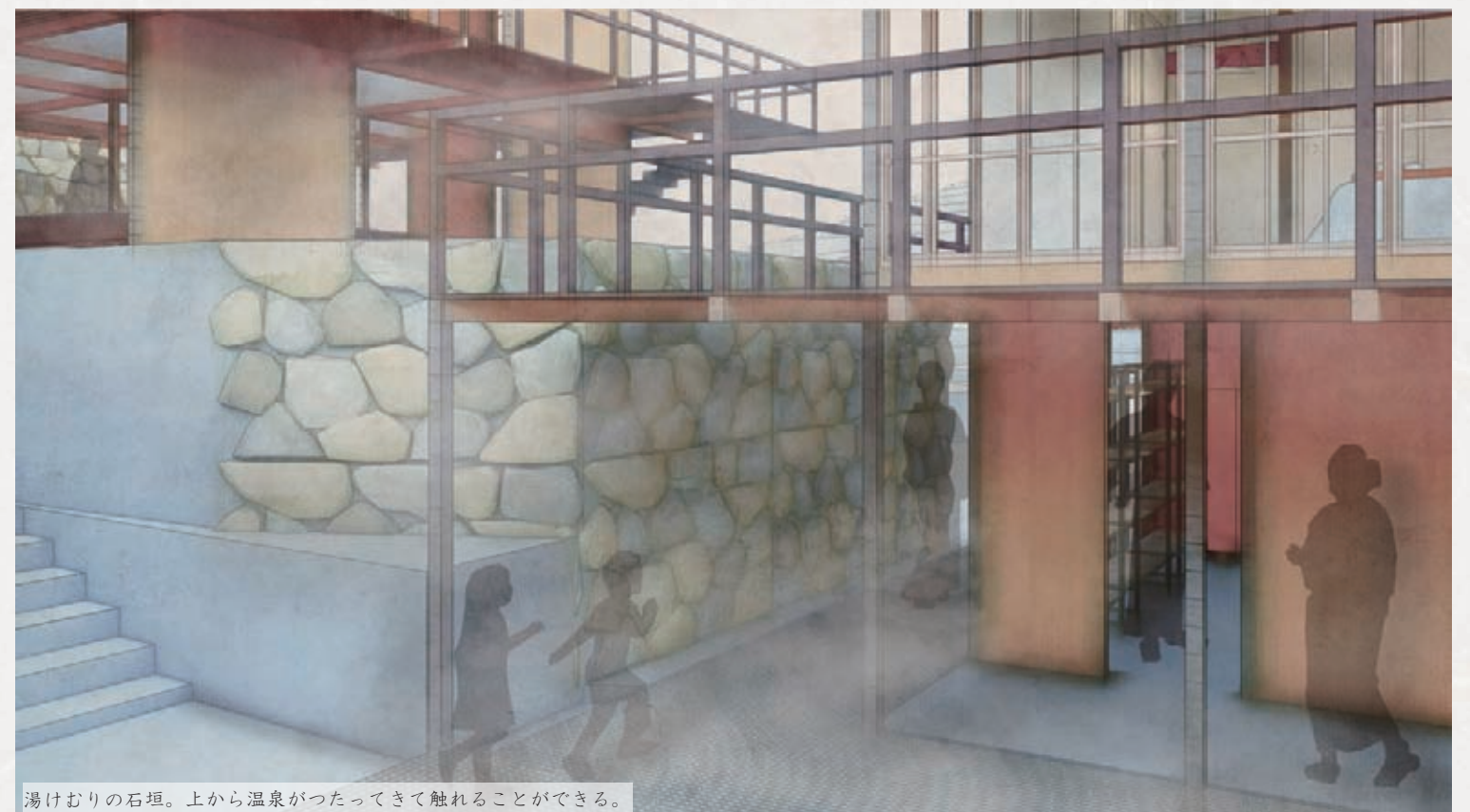
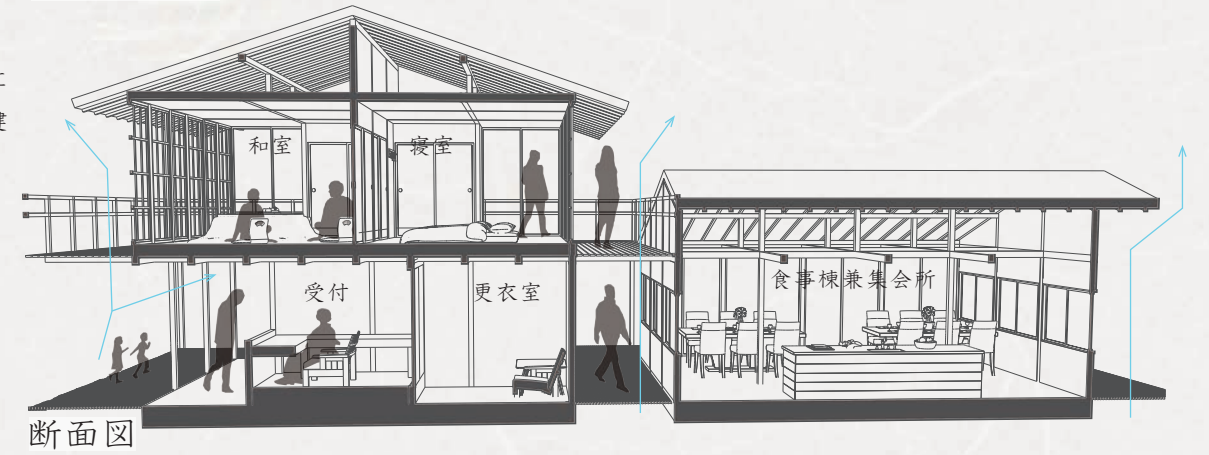
湯気の入り込み
オープンにすることで湯けおりが入
り込み、人々を中に誘う。





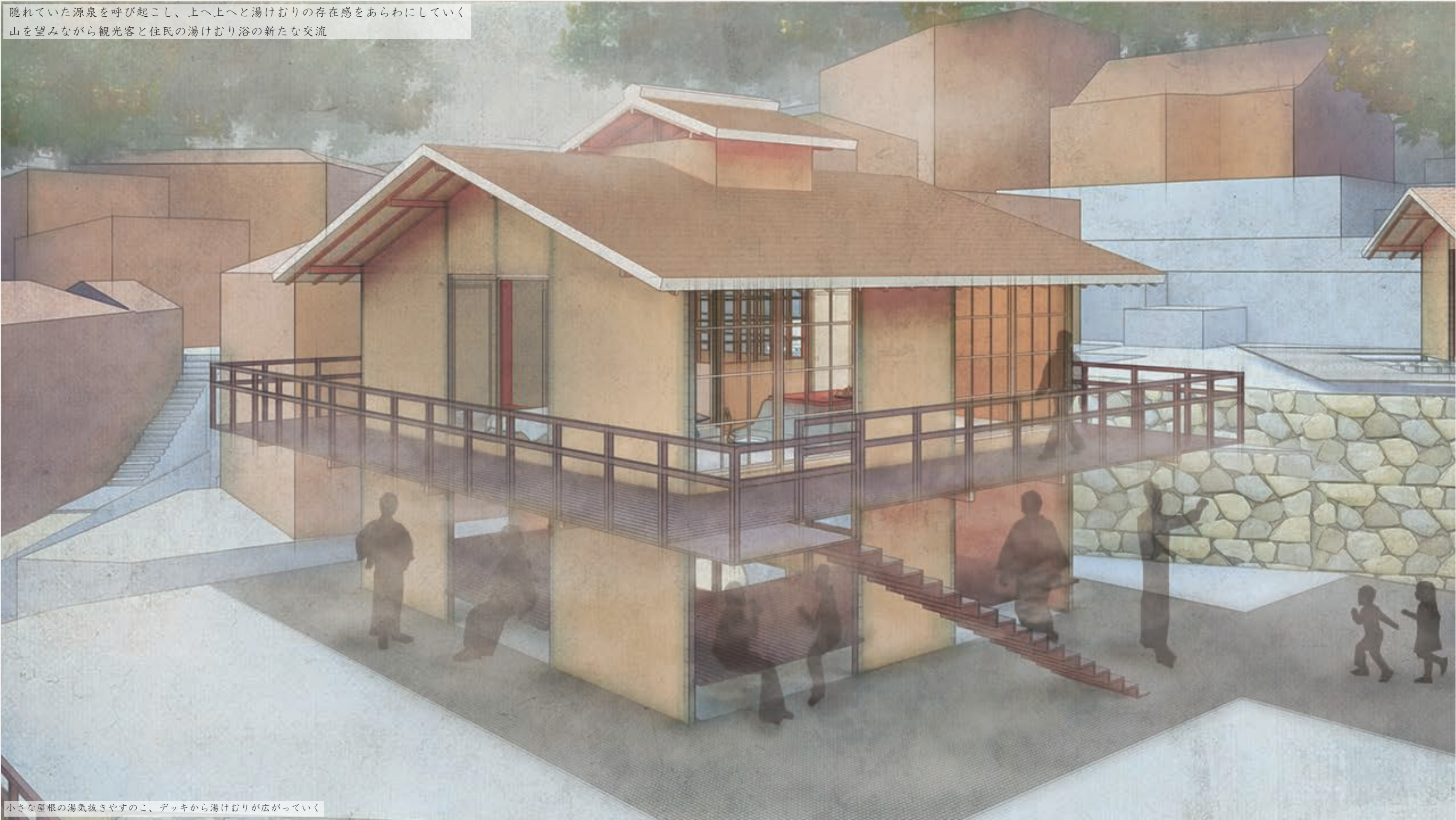
2階平面図

湯けむりが室内に
入り込んだり、建
物を包みこむ



湯けおり煙突宿

隠れていた源泉を呼び起こし、上へ上へと湯けおりの存在感をあらわにしていく
山を望みながら観光客と住民の湯けおり浴の新たな交流

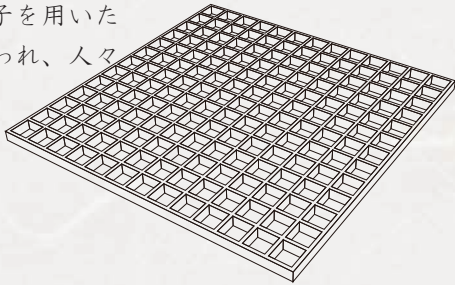


小さな屋根の湯気抜きやすのこ、デッキから湯けおりが広がっていく

湯けおりの抜け方

湯けおり格子

半明渠となる湯けおり格子を用いた
湯けおり路地。それに誘われ、人々
はやってくる。



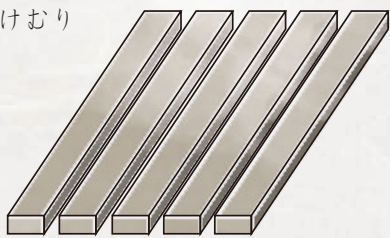
湯けおり水瓶

江津市の特産石見焼きの水瓶。
洗濯場に使われていたものを用いて
そこから源泉が湧き出る。



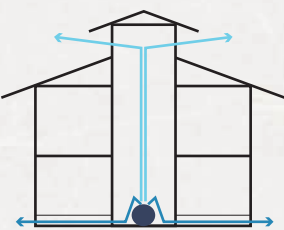
湯けおりすのこ

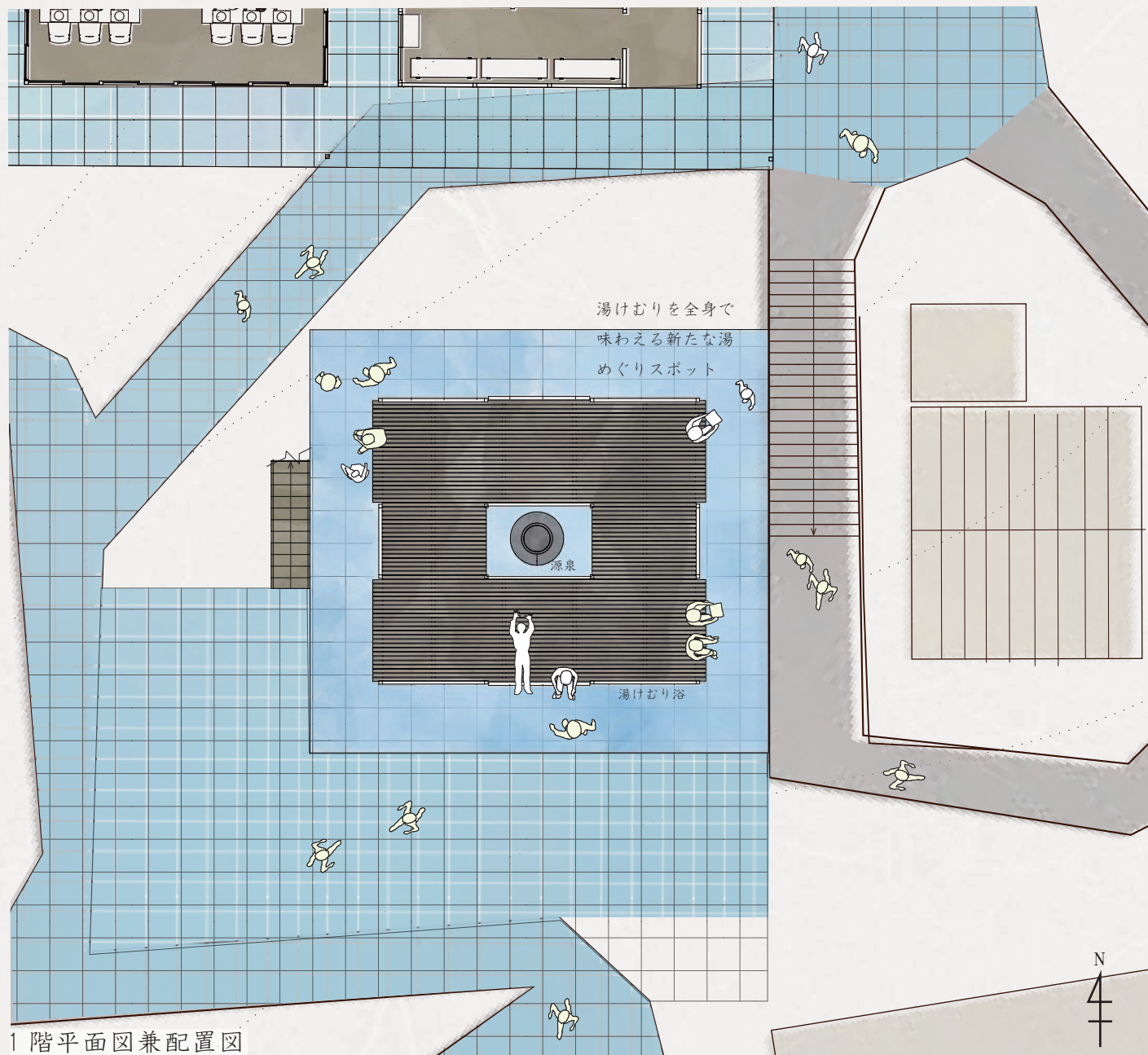
湧き出て広がった源泉の上に湯けお
りすのこを敷き、隙間から湯けおり
は漏れ出 す。



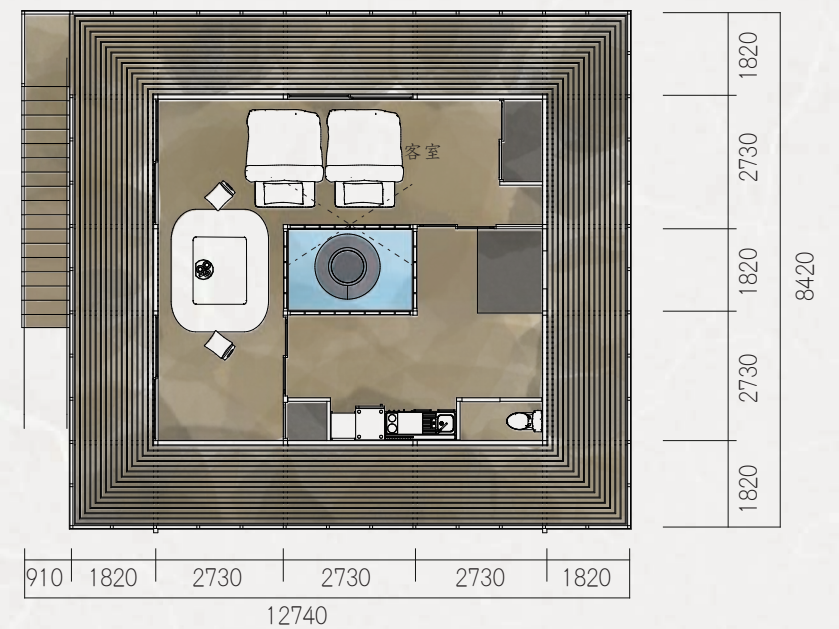
湯気抜き

中央の湧き出た源泉の湯けおりが建
物の中心を通り、湯けおりが抜ける

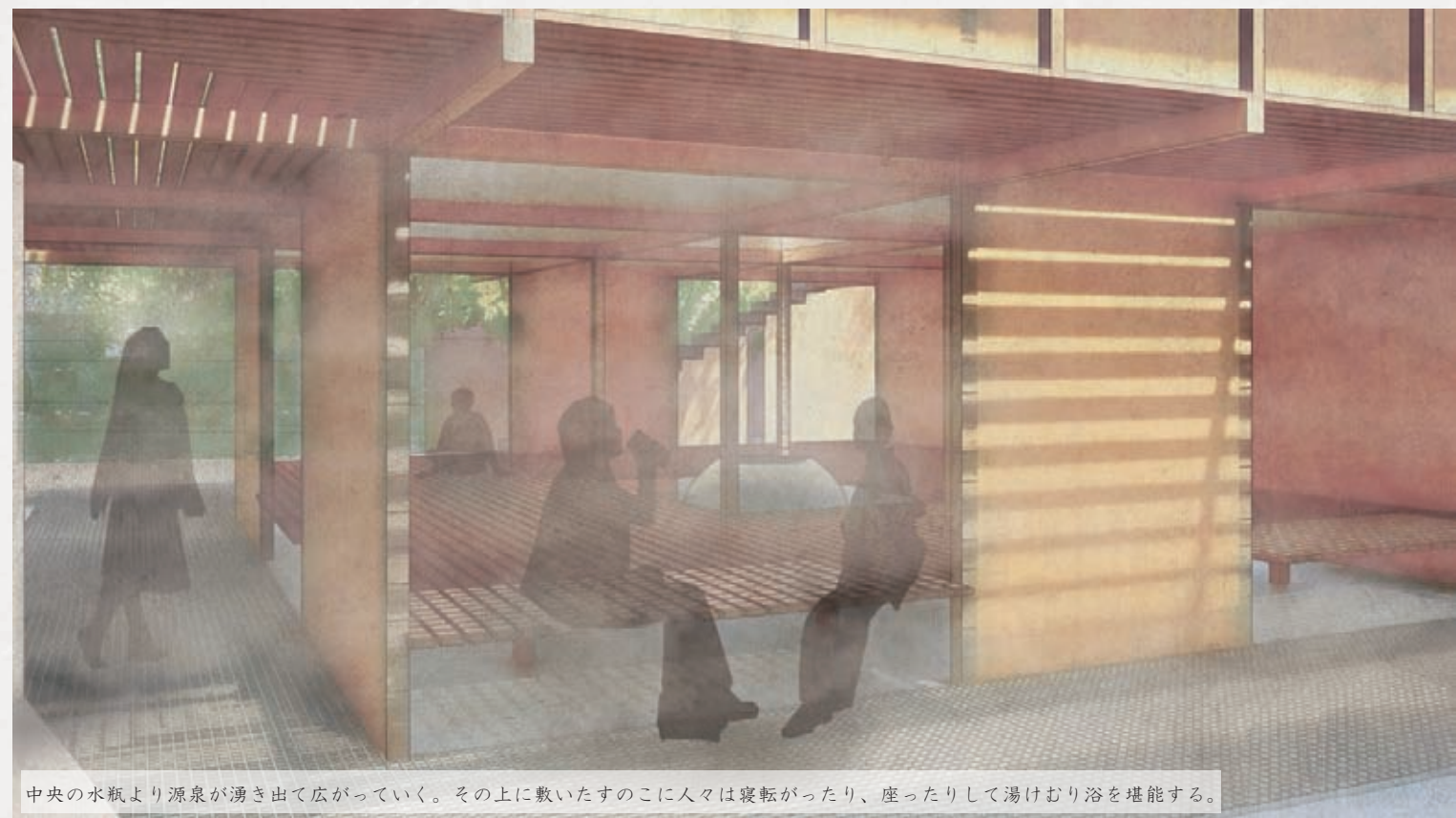
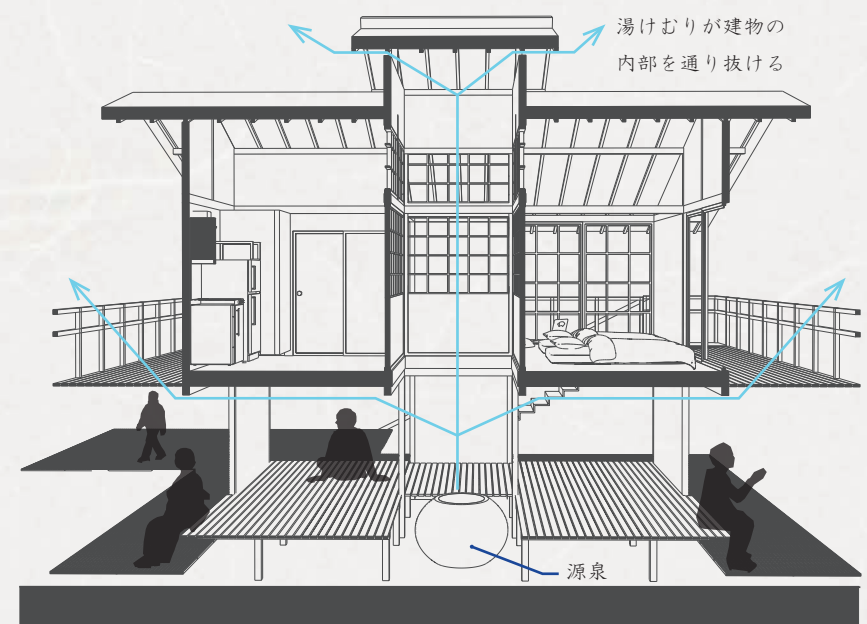




2階平面図



断面図



湯けおり小屋

かつて、源泉の発見時は岩の隙間から湧き出ていた。
そのころの有福の記憶を彷彿させ、まもるように小屋を建て包み込む。
新たな観光の場として湧き出る源泉を人々は見守る。

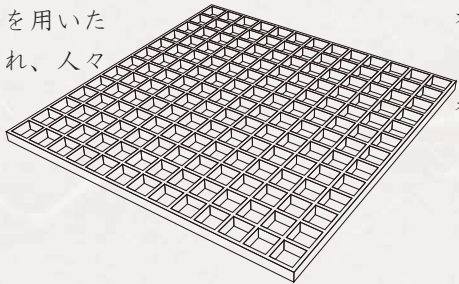


包み込まれた湯けおりが隙間からあふれ出す

湯けおりの抜け方

湯けおり格子

半明渠となる湯けおり格子を用いた湯けおり路地。それに誘われ、人々はやってくる。



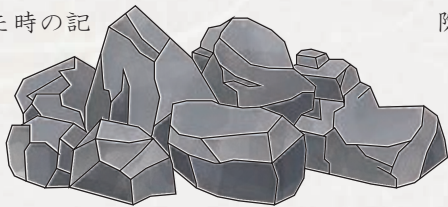
湯けおり石畳

有福に点在している石畳を用いた道をつくる。その隙間を縫うように温泉が流れる。



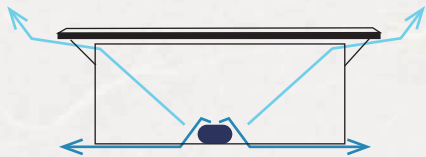
湯けおり岩

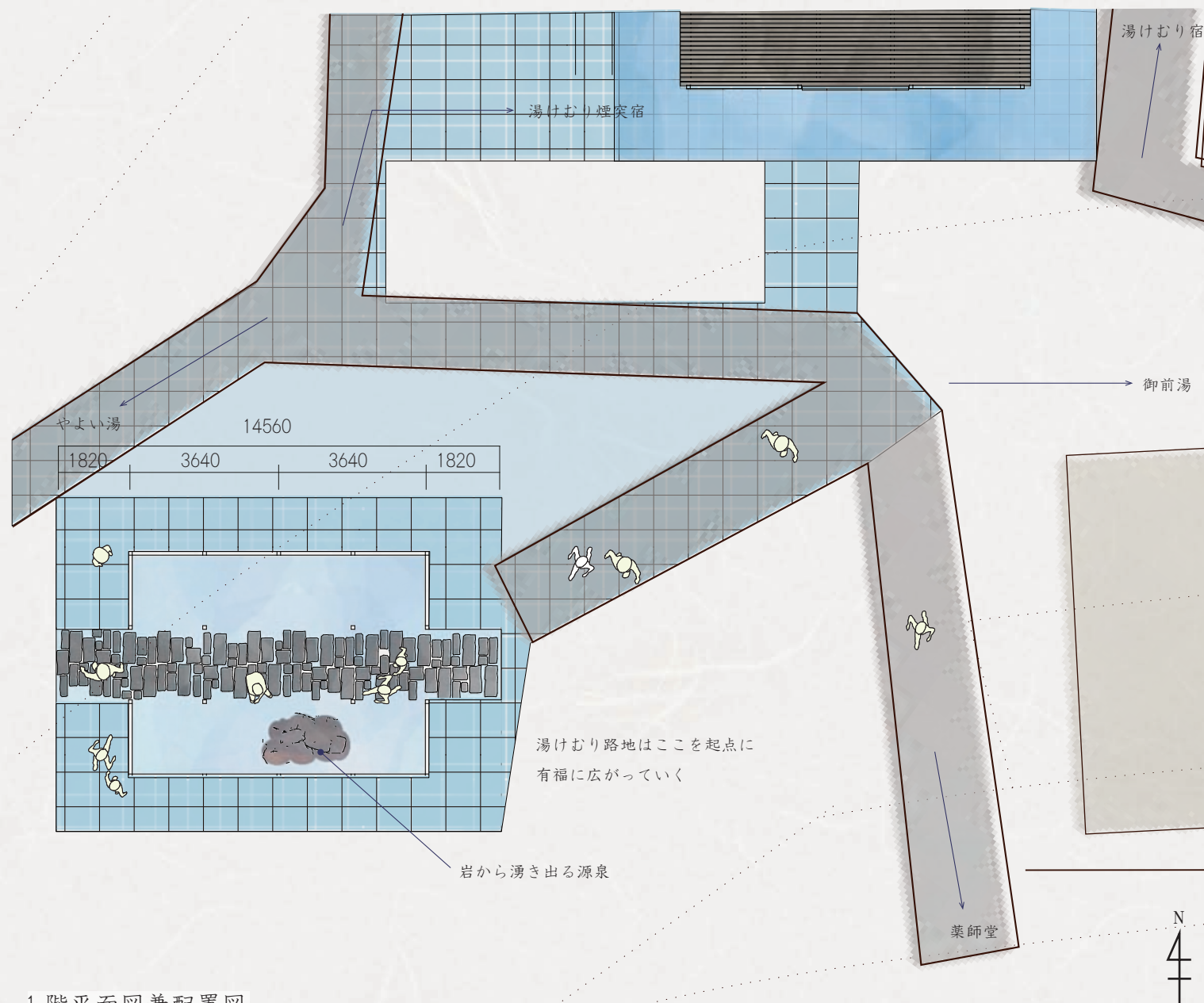
源泉が岩の隙間から湧き出てくる。有福で初めて源泉が湧き出た時の記憶を彷彿させる。



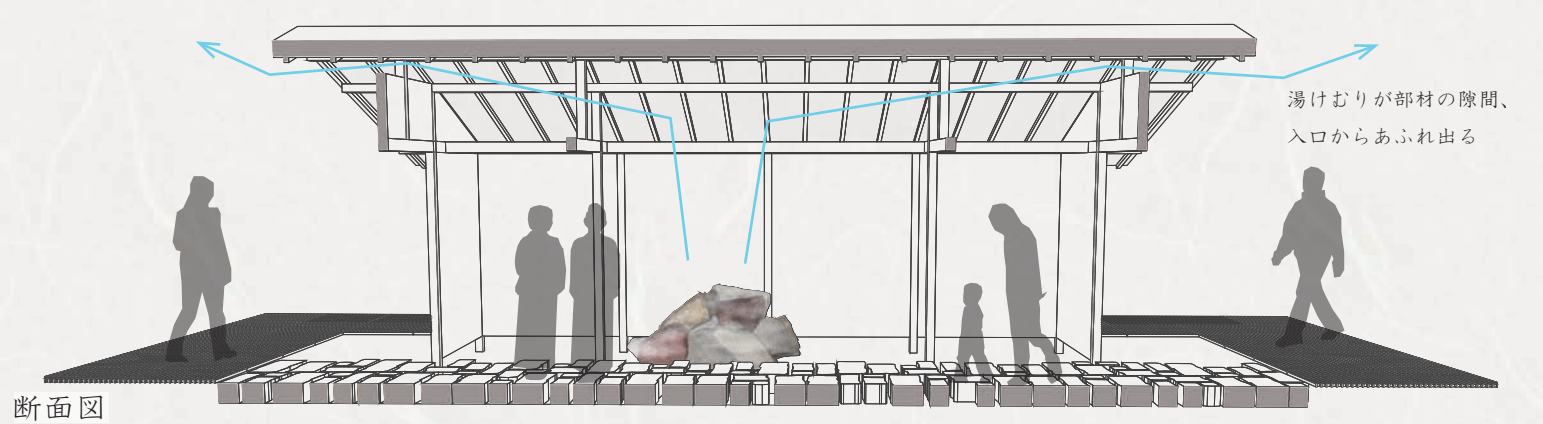
部材の隙間

包み込まれた湯けおりは屋根や壁の隙間からあふれ出す。

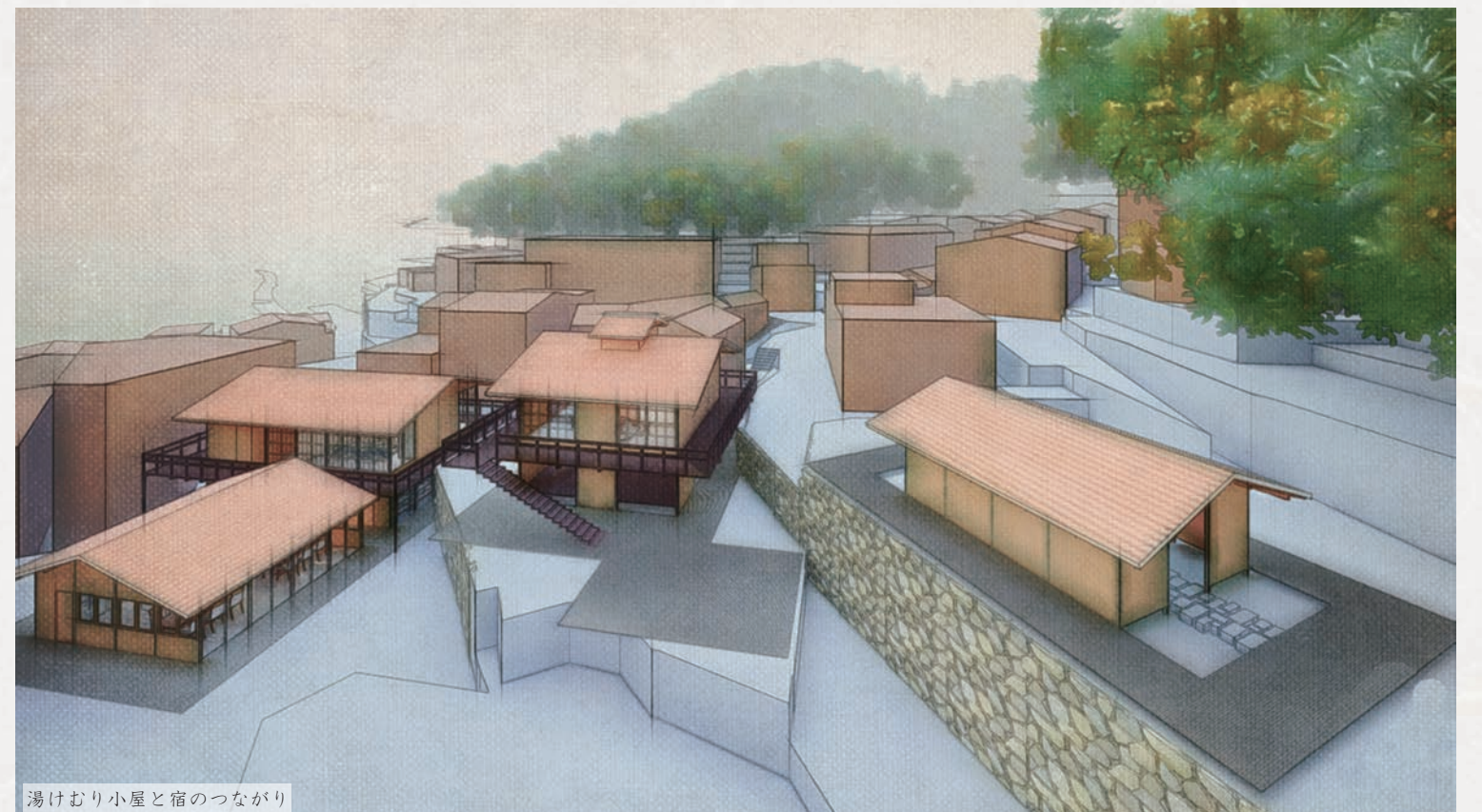
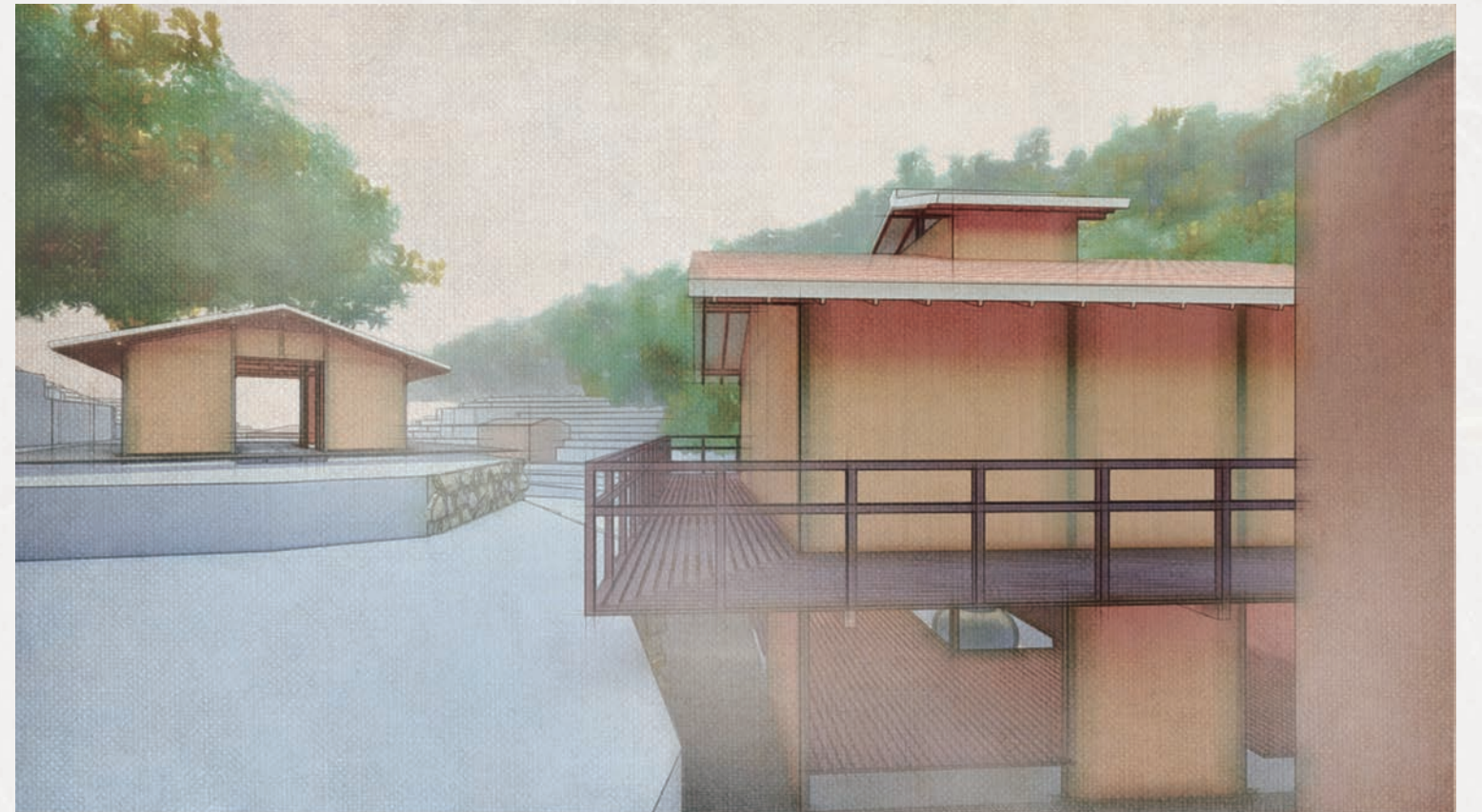




1 階平面図兼配置図



断面図



湯けむり小屋と宿のつながり

湯けむりの集い

さつき湯の隣にある空き家。

使わずに朽ちて取り壊され、ぽっかりと空くことで有福の記憶を失わせてしまう。

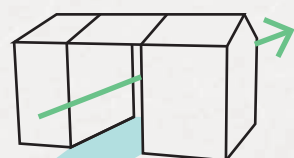
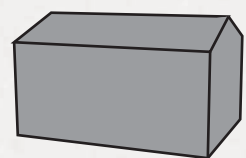
失う前に湯めぐりの待合室として生まれ変わらせる。

ここで住民と一緒に連れを待っている間に有福の記憶を共有し、後世に残していく。



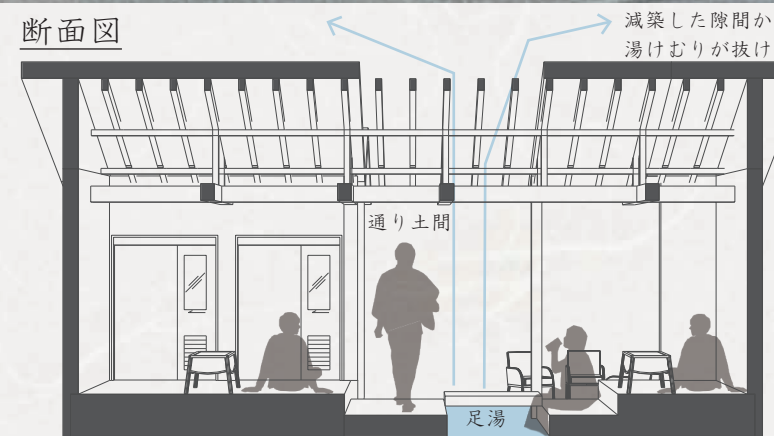
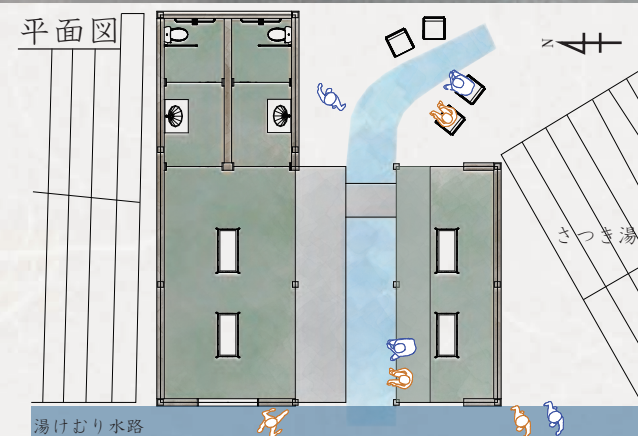
湯けむりに誘われて隣の外湯で仲良くなった人々はここで家族などの連れを待ち、あとから帰ってきた人とまた打ち解け、つながりの連座が生まれる。

減築ダイアグラム



朽ち始めている空き家。
失ってしまうと二度と取り
戻せないこの建物の中心を
減築して、補強する。

通り土間を通し、さつき湯
から温泉を引き、足湯空間
をつくり、人々をとどまら
せる。



減築した隙間から
湯けむりが抜ける

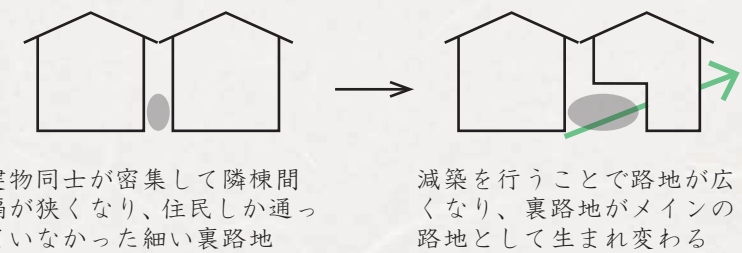


湯けむり温泉石鹸工房

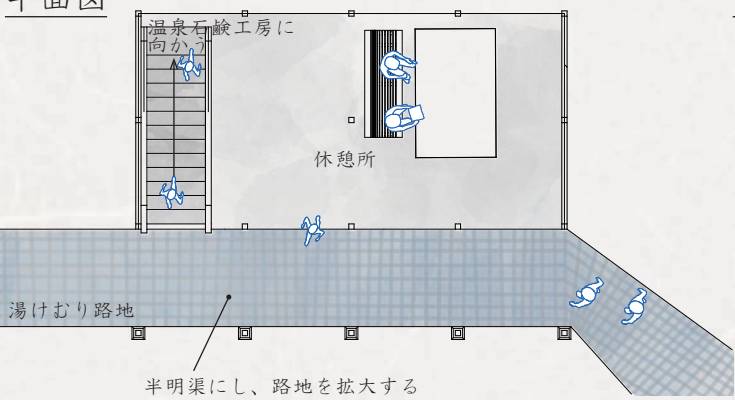
有福に着た記憶をずっと残しててほしい。
その記憶を持ち帰るために有福の源泉を使った温泉石鹸の体験工房を設計する。
塞がれた暗渠を呼び起こした川の上を歩みながら工房に入っていく、近くの源泉から温泉を汲んでくる。

暗渠として閉ざされたままだった川を半明渠とし、今まで細くて住民しか通っていなかったところを減築
をすることで路地を拡大する。今まで通ってなかった路地を拡大することで周遊路を広げる。

減築ダイアグラム



平面図



断面図

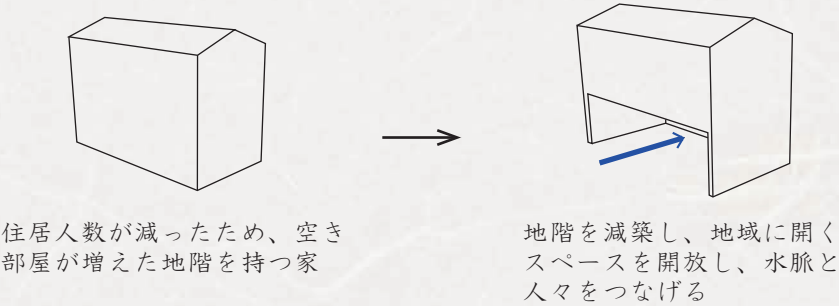


水辺の食事処・善太郎餅体験工房

川沿いにある地階。
高齢化が進んでいる有福では、使われていない部屋や家がある。
この使われていない部分にまちにひらく。
湯けむり路地に誘われ川沿いに来た人々は次は炊事の煙に誘われていく。
ここに水脈とのつながりを生む食事処と有福の名物善太郎餅の体験工房を設計する。



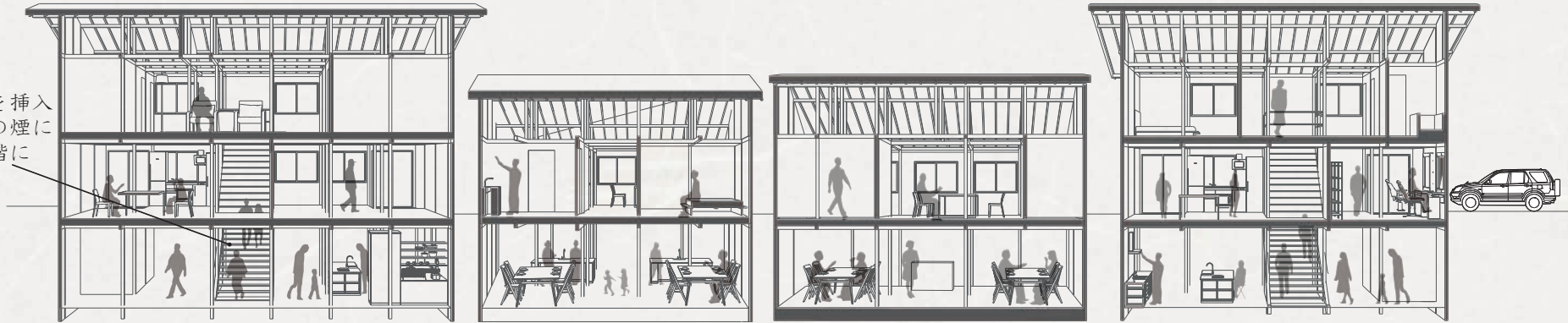
減築ダイアグラム



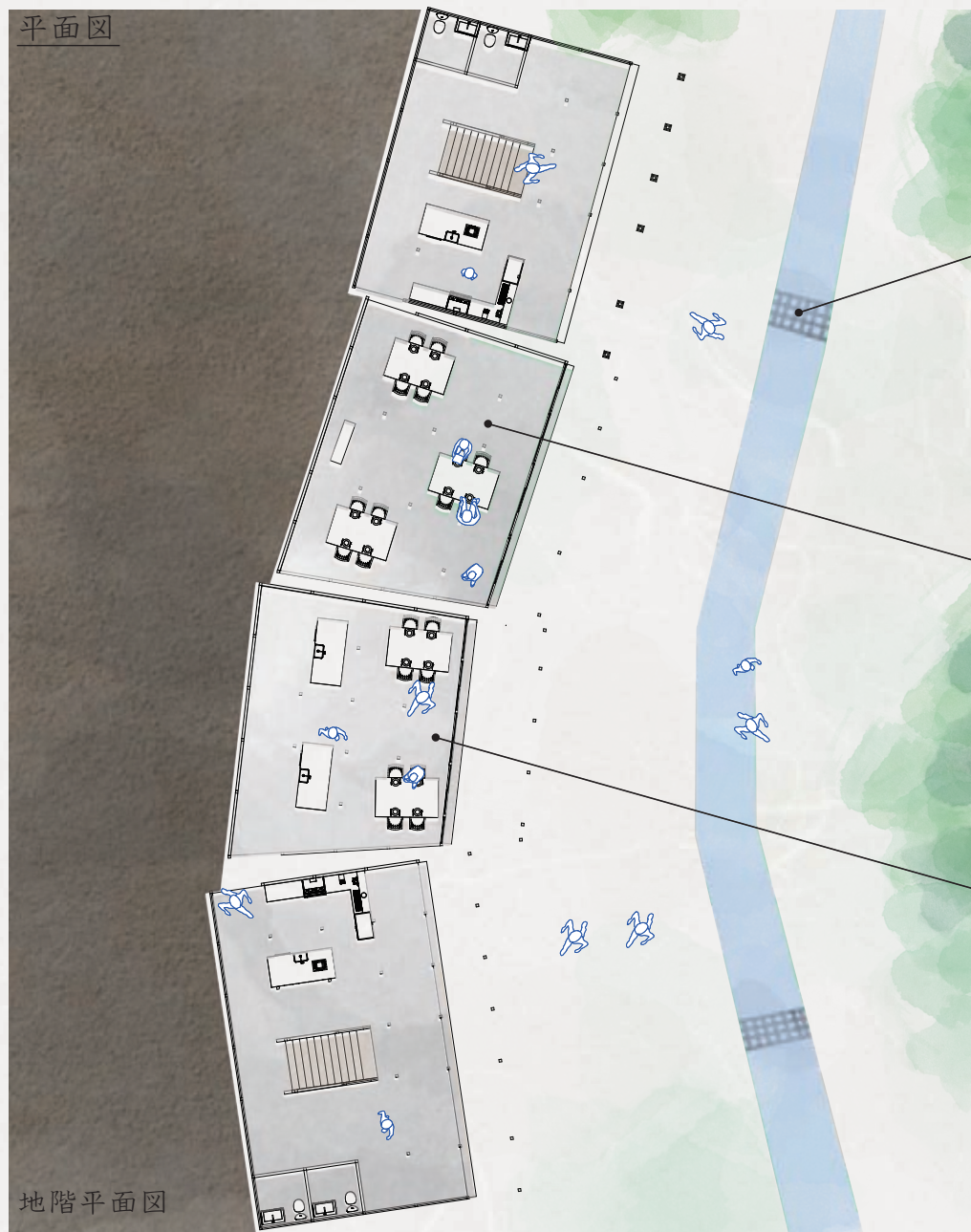
住居人数が減ったため、空き部屋が増えた地階を持つ家

断面図

建物に階段と路地を挿入することで、炊事の煙に誘われた人々は地階に入っていく



平面図



川の上に格子の橋を設置する。そうことで反対側の岸までつなげる。それにより広場空間が生まれる。

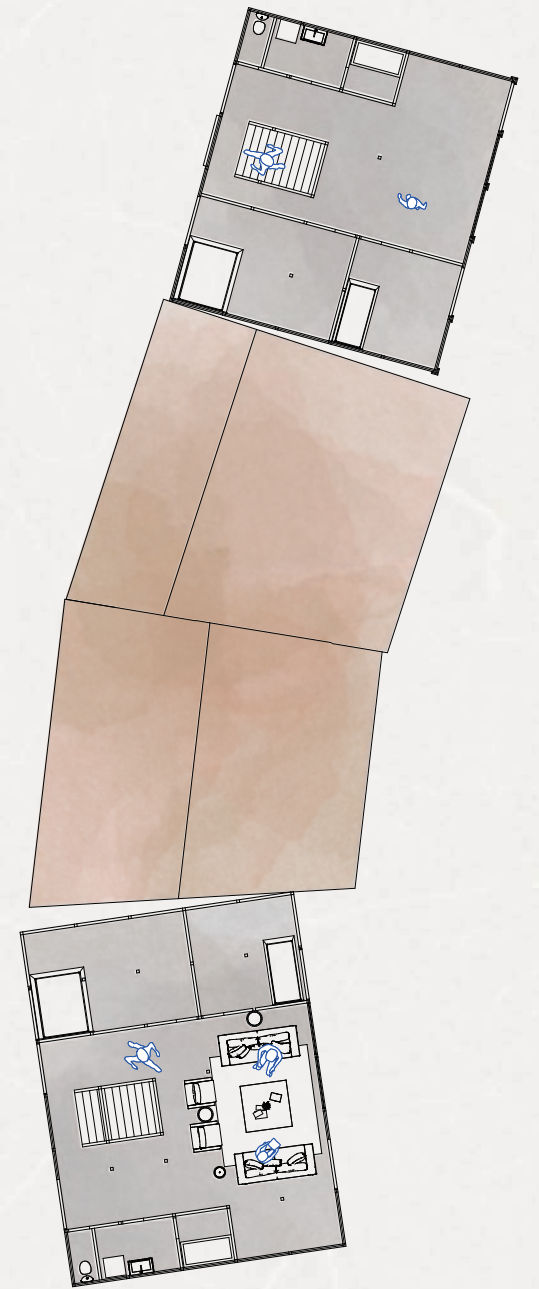
食事処
炊事の煙けむりとにおいを漂わせながら地域の交流の場となる。

有福の特産である善太郎餅の体験工房。
善太郎餅の歴史とともに有福について知っていく。

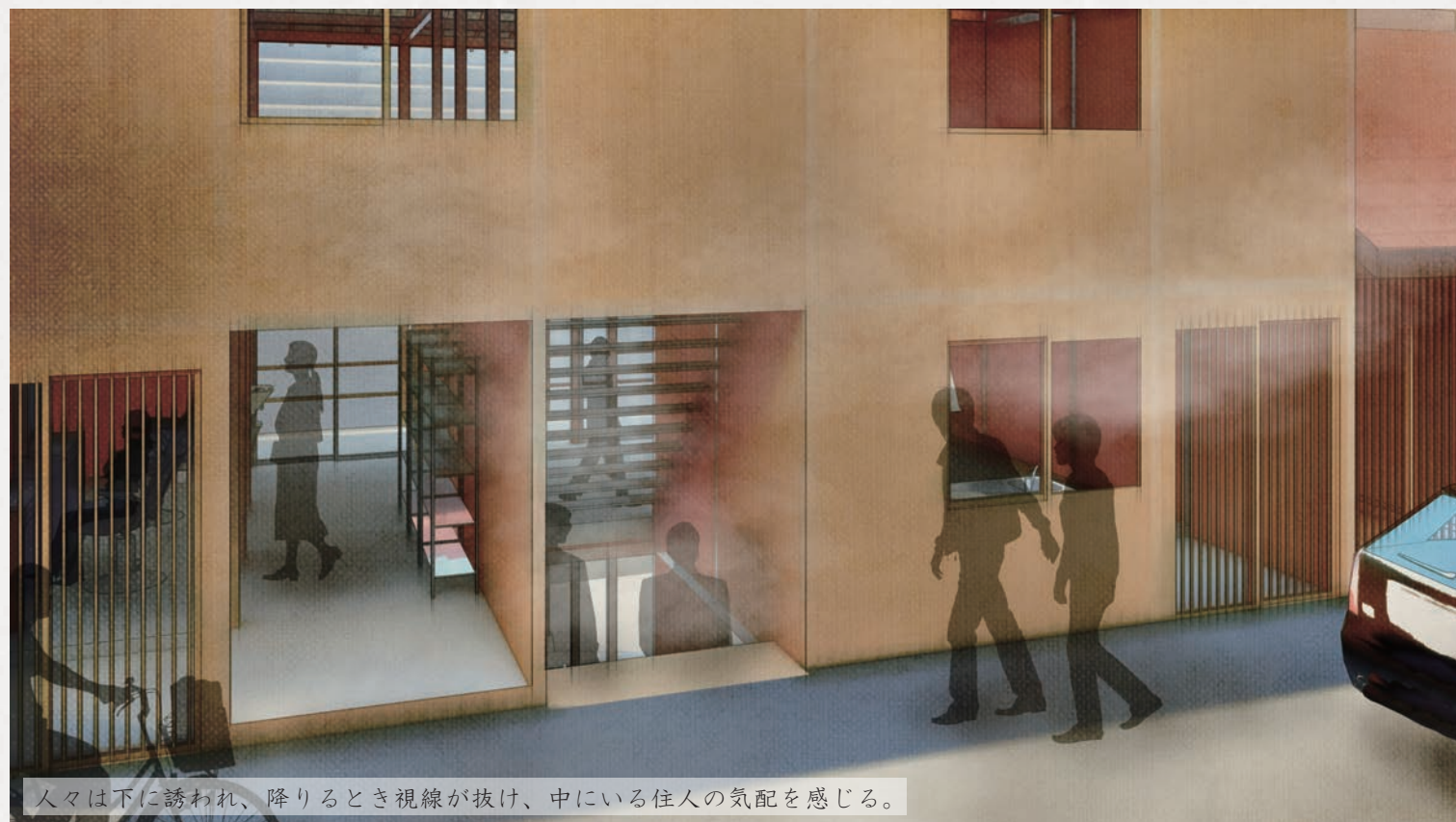
地階平面図



1 階平面図



2 階平面図



人々は下に誘われ、降りるとき視線が抜け、中にいる住人の気配を感じる。



川の上に格子を設置し、向こう岸まで行き来できるようにし、ここに広場空間が生まれる。
地階部分を開放し、食事処・まちのキッチン・体験所としてひらく。

将来

新たな周遊路を提案することで「寂れた雰囲気になっている有福にも新たな景観が生まれ、かつて栄えていたころのような賑わいを取り戻し、有福の復興と旅館再建にもつながる。

